

T. トドロフ著 及川 馥・大谷尚文・菊地良夫訳
『他者の記号学—アメリカ大陸の征服』

(法政大学出版局、1986年、B6判、361頁、4,410円)

榎本剛士

本書は、Tzvetan Todorov. (1982). *La conquête de l'Amérique — La question de l'autre*. Paris: Seuil. の全訳である。原文の題は『アメリカ大陸の征服—他者の問題』であるが、邦題では原文の副題が表面に押し出された形になっている。しかし、読み終えてみると、『他者の記号学』という表題が、内容を的確に凝縮したものであるということを強く感じさせられる1冊である。

本書は「発見」、「征服」、「愛」、「認識」の4部から構成されている。それぞれにおいて、さまざまな人物と豊富な史料・エピソードを紹介しながら、トドロフはアメリカ大陸の征服における「スペイン人」と「インディオ」の遭遇という、ヨーロッパの歴史上もっとも驚嘆に値する他者との出会い(=自己の発見)を、痛快ともいえる仕方で描写している。以下、本書の登場人物の中でも特に重要であると思われる、コロン(コロンブス)、モクテスマ、コルテス、ラス・カサス、サアグンの5人に焦点を当て、彼らの他者理解に関する著者の記述を追いながら、各部を紹介していくことにする。

第1部「発見」においては、コロンの新大陸発見、そしてインディオとの遭遇が描写されている。まず読者として興味を惹かれることは、コロンにとって、アメリカ大陸への航海は、「聖三位一体と聖なるキリスト教を讃える」ためであり、「聖なるキリスト教信仰の栄光と発展に寄与する崇高かつ高貴な」ものだったということである。その上で著者は、信仰深さゆえに、信念が常に経験に先行していたコロンにとっての新大陸発見は、あらかじめわかっている真実の確証を見出すことであったと指摘する。コロンの(自然)観察が行き着く先は、航行に関する場合は、純粋に実践的・効率的な解釈であるが、それ以外はどこな場合でも、彼の信仰と希望の正しさを立証するための、超越的目的論に基づいた解釈であった。著者は、インディオに対するそのようなコロンの態度を、自己中心主義、すなわち自己固有の価値観と価値一般の同一視、私と宇宙の混同、そして世界は1つであるという信念に基づくものであるとして、批判している。コロンは、ある場合にはインディオを完全な権利を有する、彼と同じ権利を持つ人間だと考えるが、その場合、彼らを対等であるばかりでなく、同一のものと見なしているのであって、こうした態度は同化主義に、すなわち自分自身の価値観を他者へ投影することに帰着する。そうでなければ、彼は差異から出発するのだが、この差異は、ただちに優越と劣等をあらわす言葉に翻訳される(もちろんこの場合、劣っているのはインディオである)のである。第1部における、著者のこのようなコロンの描写は、「新大陸の発見」という言い方そのものについて、再度われわれに疑問を投げかけるものである。

それにしても、新大陸の原住民の数の方がその敵よりも圧倒的な優位にあり、しかも彼ら自身の土地で戦うというのに、なぜコロンの新大陸発見以後、スペイン側に電撃的な勝利が可能だったのだろうか。第2部「征服」は、この謎を解くものである。著者は、スペイン人の征服—アステカ人の敗北の大きな理由の1つは、アステカ人がコミュニケーションを支配する力を喪失し

たことにあるとし、アステカ王モクテスマと、スペイン人コンキスタドールのコルテスを中心に、外交・戦闘の両方の場において、アステカ人がコミュニケーションを支配する力を失っていく様子を鮮やかに描いている。以下に、評者が特に印象深かったと感じるエピソードを1つ紹介する。

インディオは、スペイン人の到来という事態を説明するために、彼らの時間と能力の大部分をお告げの解釈に費やした。なぜなら、アステカ人の社会においては、彼らの記録に物語られている歴史のすべてが、前もって予言されていたことが実現したものであり、前もって言葉であったものだけが、行為となり得るからである。結果、救世主の回帰がメキシコの神話において特別な位置を占めていなかったにもかかわらず、モクテスマはコルテスを王国を取り戻しに帰ってきたケツァルコアトル（歴史上の人物であり、伝説上の人物）だと見なした。このような、アステカ人の記号を知ったコルテスは、ケツァルコアトルとスペイン人の同一視を促すよう、全力を尽くした。彼は、モクテスマとの最初の会見の際、「あなた（コルテス）を当地に派遣なさった大君主、つまり国王についてあなたがおっしゃっていることを聞いておりますと、その方こそきつと私たちの本来の主君であることを信じて、確信しております」と言うモクテスマに対し、スペイン王カルロス5世こそ「彼ら（アステカ人）の待ち望んでいるそのお方であると思ひ込ませる」返事をするので、モクテスマの不安を解消すると同時に、モクテスマの確信を裏付け、抵抗の理由を奪うことに成功したのである。第2部においては、上記のような、アステカ人とスペイン人の間に存在する、コミュニケーションの本質的な違いが、多くのエピソードとともに描写されている。

第3部「愛」では、スペイン人によるアステカ人征服後の（神の御加護による）支配の過程が、生々しく描かれている。コルテスは、インディオ（の記号）を理解し、彼らに感嘆の念さえ抱いていたが、それは家屋の建築法や織物など、すべて事物に関するものだった。この場合、インディオはまさしく主体ではあるが、事物の生産者や職人という「役割に還元された主体」でしかなく、スペイン人の目的達成のための採算というレベルにおいて扱われる。このような、主体としての他者を十分に認めない理解が行き着く先は、残虐ともいえる搾取と掠奪、そしてその後の殲滅への連鎖であることを、著者は的確に指摘している。このような状況の中、インディオを擁護する立場をとった修道士ラス・カサスの描写は、特に興味深い。彼は、「神は自らの姿に似せて人間を創造したのだから、人間を侮辱することは、すなわち神自身に背くことである」とし、スペイン人とインディオの平等を主張した。このような「愛」に対し、著者は、「インディオの人間性を肯定するにとどまらず、インディオのキリスト教的〈本性〉までも肯定することになる」として、その危険性を主張している。ラス・カサスは、キリスト教徒であるからこそ、インディオという他者を物体と同列に追いやることを拒絶し、彼らを愛した。しかし、そのこと自体、すなわちスペイン人がインディオを理解（しよう）すること自体が、インディオという異質な他者を、自我の名において変形することであったということが、第3部「愛」全体を通して明らかにされている。

第4部「認識」では、対他関係の類型として、まずラス・カサスの変化が描写される。彼は1550年あたりを境に回心し、インディオの神は〈真実の神〉ではないにもかかわらず、彼らからはそのようにみなされていることを認めた。著者は、それを「私たちの神が真実であるのは私たちに対して—私たちに対してだけ—であること」を承認することに向かったの、最初の1歩であったとしている。絶対的な価値としてのキリスト教ではなく、宗教性を重要視し、「各人は自分にふさわしい道を通して神に近づく権利を持つのだ」という結論に至ったラス・カサスは、イ

ンディオを同化させることをあきらめ、インディオの将来はインディオ自身に決定させるという中立の道を選択した。著者は、このようなラス・カサスの態度を〈分配的〉で〈透視図法主義的〉な正義として分類する。つぎに著者は、バスコ・デ・キロガ、ゴンサーロ・ゲレーロ、カベサ・デ・バカラを例にとり、自己同一視または同化の働きの軸における行動を検討するが、なかでも特別な例として、ドウランとサアグンを挙げている。両者とも、インディオの徹底的な改宗またはキリスト教の布教を目的としながらも、実践レベルでは彼らの文化に同化することで、インディオをよりよく理解した人物として紹介されている。なかでも、インディオの言説を翻訳する際、自分の声と情報提供者であるインディオの声を、一切の混同が起こらないような仕方ですべて併置するサアグンの仕事は、非常に印象的である。著者は、彼の描写には、一切の価値判断が存在しないだけでなく、いかなる解釈も存在しないことを指摘する。アステカの神々について語る場合でさえも、サアグンは〈神〉という語と〈悪魔〉という語を交互に使用し、(自らの)体系の不在を1つの体系として仕立て上げることで、対立する道徳的判断を指す2つの語を中立化し、結果それらを同義語とした。さらに彼は、インディオを同一視したり、理想化したりするのではなく、彼らのさまざまな特徴を生活条件の違い、特に風土的条件の違いによって説明する。こうして彼は、自らの価値観としてのキリスト教は堅持しながら、他者認識の手段としてのキリスト教の相対性を露呈させた。著者は、サアグンが扱う主題自体に、ヨーロッパ的知の押しつけが見られることを明らかにしつつ、サアグンの目論見が「2つの声の相互浸透を促進することではなく、それら2つの声を併置することにある」とし、それをインディオという他者に関する説明の仕方における、大きな変化として位置づけている。

以上、『他者の記号学』における主要な人物の対他関係を見てきた。第2部において、トドロフは、スペイン人の勝利は世界と人間のコミュニケーションを深く抑圧し、一切のコミュニケーションは人間間のコミュニケーションであるという幻想を作り出したとしている。また、世界と一体化する自らの能力を心のうちで踏みつぶすことになったヨーロッパ人の勝利には、敗北が内在していたのだと指摘する。この指摘は、現代を生きるわれわれにとって、大きな意味があるが、最後に評者自身が本書を読んでいる間、逃れることのできなかつた疑問について言及したい。それは、「自分が日々行っている(と思い込んでいる)他者理解は、誰のものに近いのか？」という問いである。本書における、コロンからサアグンへの流れは、他者認識の欠如から自己と他者の相互浸透、そして併置であるとともに、独白から対話への道程であるといえる。しかし、彼らの対他関係を支えているものは、彼らが生きた時間・空間における(キリスト教をはじめとする)知や、社会・生活のあり方と密接に絡み合った宇宙観や世界観、人間観、文化観ではなからうか。これを今日の問題に置き換えると、「多文化共生」や「環境保護」ということばの中にある「文化」や「環境」は、何を指しているのかという問いに帰着する。そこには、「多」や「共生」という概念が適応可能な「文化」の概念があり、「保護」や「破壊」という行為の対象となり得る「環境」の概念が存在する。しかし、そのような「文化」や「環境」の概念を通して「多文化共生」や「環境保護」を語ることで、それらを生んだある特定の社会認知、すなわち世界観、人間観、自然観を押しつけることではないのか。『他者の記号学』という1冊の書物を通して、評者が強く感じたことは、われわれは本評でとりあげた5人のうちの誰にでも、瞬時において変わり得るという危険性があると同時に、われわれが前提としている概念を問い続けることが、いかに重要であるかということである。